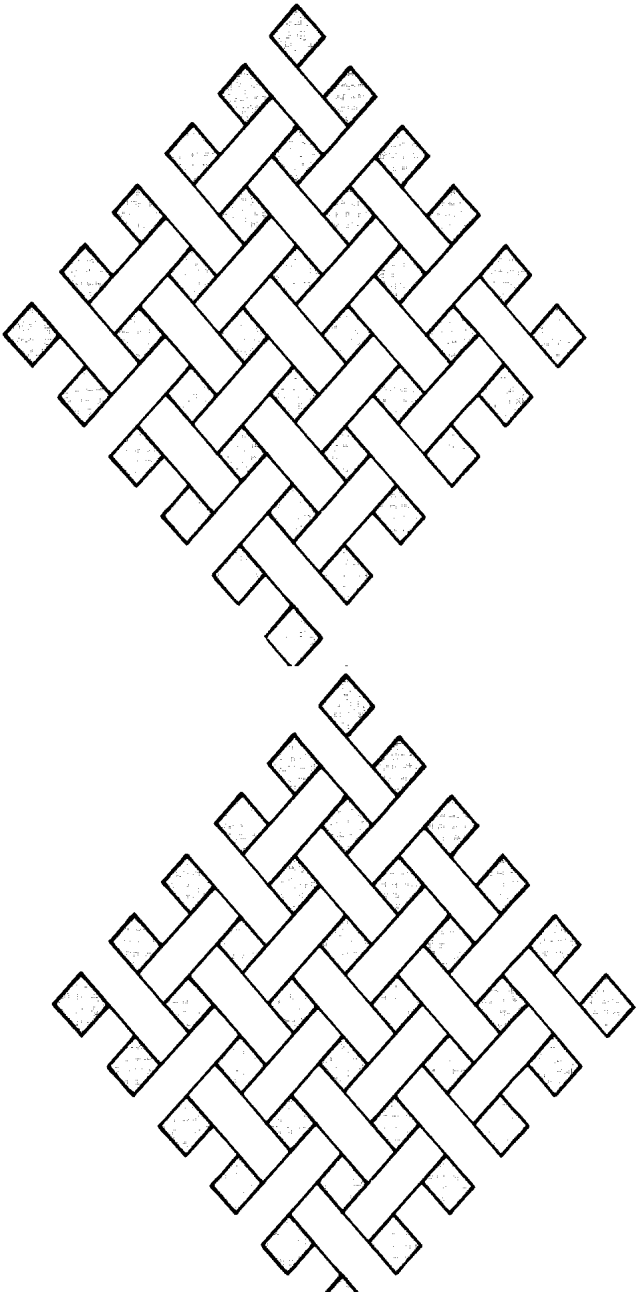
現代韓国文学選集—4

短篇小説 II



冬樹社

現代韓国文学選集（全五巻）
第四巻短篇小説Ⅱ（第三回配本）
昭和四十九年十二月三十一日初版第一刷発行

著　者　姜龍俊ほか
著作権者　林仁圭
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神保町二の十八　〒一〇一
電話〇三(二六四)〇三四六　振替東京八―七七五七
印刷所　三省印刷株式会社
　　稲葉印刷株式会社
製本所　一重製本株式会社
装幀者　栃折久美子
©Lim In Kyu 1974
0397-30126-5190

現代韓国文学選集　第四巻

編集委員

金東里
金素雲
金顯承
白鐵
徐廷柱
李御寧
黃順元

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代韓国文学選集

第四巻・短篇小説Ⅱ

目次

トカゲの抗弁〈姜龍俊〉……二
丸木橋〈郭鶴松〉……三
バビト〈金聲翰〉……四
畜生図〈金廷漢〉……三
天地玄黄〈南廷賢〉……六
瑕瑾（きず）〈朴敬洙〉……八
あるパリ〈朴順女〉……二三
ソウルの部屋〈朴泰洵〉……一三七

小屋暮らし〈方榮雄〉……一四九
静かな河〈白寅斌〉……一六三
コクマル鴉のその啼き声〈孫素熙〉……一八五
底なしの陥穽〈宋相玉〉……二〇七
帰休兵〈辛相雄〉……二三三
背信〈吳尙源〉……二四三
月光〈吳有權〉……二五九
張氏一家〈柳周鉉〉……二七一

巨人〈劉賢鍾〉……二九一
蓮妙尼〈李文求〉……三一三
雨期の詩〈李文熙〉……三二七
劉子略伝〈李祭夏〉……三四五
海辺の人たち〈李清俊〉……三七五
作品B〈鄭乙炳〉……三八七
旧家〈鄭漢淑〉……四〇三
酒虫〈崔仁浩〉……四二九

道連れ〈崔一男〉……四四三
白い紙ひげ〈河瑾燦〉……四五三
神への約束〈韓末淑〉……四六九
六〇年代の韓国小説〈廉武雄〉……四八六

――作者名配列・ハングル〝가나다〟順――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

短篇小説 Ⅱ

〈1950年代以後〉

姜龍俊

一九三一年黄海道安岳に生まる。一九五〇年平壌師範大学在学中北韓軍に徴され、一九五〇年十月から一九五三年六月まで東萊、巨済島、光州などで捕虜生活。一九六〇年短篇〈鉄条網〉が「思想界」第一回新人文学賞に当選。短篇〈六本指さん〉〈トカゲの抗弁〉、長篇「黒焔」など。一九七〇年中篇〈狂人日記〉を「創作と批評」に発表、一九七三年同作品で「韓国日報社」制定の韓国創作文学賞受賞。

トカゲの抗弁

ブーン、ブーン。あいつはまるでとんびそっくりだ。じじつ、その薄気味わるい——あいつの音さえ聞けば否応なしに怖気立つんだから——音響を別にすれば、これは紛れもない、夏空に犬糞でも狙って飛びまわるとんびと変わりがない。それは正真正銘、犬の糞でも漁ってしょうことなしに飛びまわっているとんびそっくりだ。だが残念ながらそれじゃない。

ぼくはポカンと空を仰いだ。空が青い。だからまたひもじくなる。目まいのするほど青い空を見ていると、ぼくはすぐひもじくなる。だが、やはり補給品はのぼって来られない。どんなことがあってものぼれまい。ぼくはやたらに怒りっぽくなる。仕方のない話だ。

どんなつもりなのか、敵はこの何日間、全面攻撃は根っからそっちのけにして、こうやってブーン、ブーン、偵察機だけを飛ばしている。きっと補給路を遮断してしまうつもりらしい。そしてこちらの戦闘能力を完全に麻痺させたあとで高地をいとも易々と一ぺんに平らげてしまおうという魂胆なんだ。いかにも残酷なやり方だな。いうまでもないが、国軍の偵察機が、ちょうど獲物を狙うとんびのように高地を渓谷伝いに頭の上をぐるぐる旋回して南の方に消えると、十分も経たぬうちに国軍の長距離砲はこちらの後方補給路をめったやたらとブッつぶしてしまうのだ。離れ島にポッンと取り残された格好の人民軍の兵士などには用はないとでもいうように、真っすぐに頭の上を北にばかり飛んで行く。つづいて激しく撃ちまくる機関砲の音、小型爆弾の炸裂する音が後方の山向こうから聞こえる。こんな按配だから、高地で補給を待つなどは空から星の落ちるのを待つようなもんで、愚の骨頂に違いない。

ブーン、ブーン、高地目指して上昇した偵察機が、エンジンをとめて、するすると下降する。これじゃ全くのところ離れ島に押し込められたも同然だ……。ぼくは側の八路軍を見やった。ヤツはほとんど完成に近いたばこのパイプを持ちあげて見せながらニヤッと笑った。この戦争がこれ以上拡大されない限り、これが最後の作業になるかも知れないと、ヤツはきのう自慢そうにしゃべっていた。ヤツは熱心に骨を削ったり、磨きをかけたりした。

「あれ間違いないな？　参戦十六カ国というの……？」

そうだとぼくが頷いてやると、ヤツは自分の削っているその骨ほどにも白い歯を、黒く日焼けした顔に剝き出しにして、これは濠洲兵の脚の骨だが、参戦十六カ国と国軍のヤツまで合わせて十七番目になるんだと付け足しながら、またニタッと笑った。こんな場合ぼくは、いまに始まったことじゃないと泰然とはしてみせても、なぜか空恐しいばかりの恐怖感を払いのけることができなかった。やはりヤツは八路軍出だ。まっ黒に焼けた顔がお化けのように白い歯を剝き出して残忍に笑いかけると、ぼくはぞっとする悪寒といっしょに、ヤツが八路軍出だということをいまさらのように再認識しないわけにいかない。ぼくは仕方がないと諦めた。十何年もの間、まるっきりの野宿で生きてきたからには腹の中まで冷えこまぬ道理もないではないかと、ヤツが腹痛を起こして壕の底に転げ回るときも、ぼくは病人に対する同情より先に背すじを走る悪寒が先だつのだった。そういった愚かな感情は、いかにも見すぼらしい自分の経歴を思うとき、いっそう重みが加わった。ヤツは残忍だ。それだけにヤツは常に余裕と自信に充ちている。黒い顔が白く笑いながら引き金を引くとき、ヤツはまたとなく残忍だが、それよりも、ヤツのいかにも自信満々な態度にはただただ恐れ入るほかない。それは一種の残忍な美でさえある。ヤツは多発銃を撃つときだって一ぺんには撃ちまくらない。連続射撃などは新米のやることだ。規則的な点発だ。一発か、多くて二発、ゆっくりと落ちついて撃つ。ヤツが脱走兵の——その脱走兵というのがほとんどヤツの直属部下だが——後頭部を狙って静かに一発ぶっ放すときも、ヤツは自分が受けてきた教育、裏切り者に対する無慈悲な憎悪の報復手段としてではなく、ヤツはただ卑怯と無秩序を撃つのである。ヤツはむろん党員だ。しかし、多くの本物でない下っ端党員たちが匂わす、あのバカげた突拍子もない残忍性——そんなのは洗練された高度の残忍性とは言えない——をヤツからは爪の先ほども見い出せない。無慈悲で、冷血で、一つの目標を目指す画一的な一律性が党の内容ではあるが、ヤツの残忍な自信に充ちた、その上ヤツの匂わすあの冷たいまでの強靱性は、ヤツが必ずしも党員であるからというわけではない。ヤツは八路軍出身なのだ。十数年を野宿だけで生きてきたので、腹痛を持病に持っているこの八路軍出のまえで、ぼくはどうしようもない恐怖を感じる。それにいまコヤツは人間の骨を削っている。いつかはぼくもヤツの銃で死ぬことだろう。それを思うと背すじがうそ寒くなる。黒い顔に白い歯を剝き出しにして、静かに引き金を引くヤツの残忍な姿を見せつけられるとき、

または、どっかとあぐらをかいて熱心に骨を削っているヤツの、あのお化けのような様子を見せつけられるとき、ぼくはどうしようもない恐怖に駆られるのである。

ブーン、ブーン、国軍偵察機が最後の旋回を終えて南に機首をまわした。やがて高地の上には透明な空だけが残る。戦線特有の、あの限りない寂莫が透明な空から這い広がる。

八路軍はパイプを口につけてみる。何度か吸ってみる。それからヤツはパイプを口から離すと吸い口の端を仕上げにかかった。どうやらできあがったらしいな。ぼくは壕の壁に斜かいに体をもたせて目をつぶる。腹がグウと鳴った。ぼくは微かに笑う。

「やい、野郎、眠ってもいいぜ。昼前には国軍が攻撃なんかして来ないから」

ヤツはこちらには目もくれずそうぬかした。敵が攻撃してくる―、くそっ！　ぼくはまたニヤリと笑う。それはすべてのおしまいを意味するからだ。だからヤツは、そのまえに一眠りしておけとでも言いたいんだな。ぼくは頭を壕の壁にもたせかけて緊張を解いてみる。体が溶けこむようだ。腹の虫がまたグウと音を立てた。それといっしょにぼくがもう一度ニタリと笑いかけたとき、何かがドサリと壕の中に落ちて来た。目を明けた。トカゲだった。なんとも奇妙だった。どうしたはずみで迷い込んだのだろう？　壕の底に落ちたヤツの二つの目玉が光っている。ヤツは、ひどくびっくりした様子だ。丸い二つの目がすっかり怯えきっている。そうだ！　ヤツは怯えきって慌てて駆け出しながら、また道を踏み違えたのだ。間違いにしても並大ていの間違いじゃない。これはまるで虎穴にのこのこ入って来たも同然だ。狼狽したヤツの丸い目玉にもちゃんとそう書いてある。しばらくポカンとしていたヤツは、かくてはならじとでも思ったのか、壕の壁を伝ってスルリと這い上がりはじめた。ほとんど同時だった。バタッと何か投げつける音といっしょに、ヤツがまた壕の地べたに落っこちた。八路軍だった。いつの間にか八路軍もこちらを見ていた様子である。もともとトカゲというヤツはひどく素早しこいシロモノなのだが、しかし八路軍の前ではものの数ではない。地べたに落ちたトカゲは地べたを二度ばかり這いまわったが、またスルスル壕の壁を這い上がった。八路軍がまたバタッと打ち落とした。壕の底に落ちたトカゲは暫くじっとしていたが、こんどは壕を横切ってこちらの壁に這い上がった。八路軍がまた打ち落とした。トカゲがまたのぼる。八路軍がまた打ち落とす。すると、トカゲは壕の地面をまた二度ほど這いまわってから、こんどは向こうの壁に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com